
ハーレム大作戦！

クロック

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハーレム大作戦！

【Nコード】

N3131Q

【作者名】

クロック

【あらすじ】

友人の家に帰る途中、雷に打たれて気が付けば天国にいた。これはオタクな青年が転生して自分のハーレムを作る愛と友情の奮闘記です。苦手な方はバックしてください。

プロローグ

今日は大学の友人から借りたギャルゲーを満喫する予定だった。空から雷が落ちてくるまでは――。

「おい、起きるのじゃ〜。」

「…ん…此処は？あんだ誰？」

ペシペシと頬を叩かれてゆつくりと目を覚ますと、目の前には頭に天使のような輪っかをつけて白装束の恰好をしたじいさんがいた。

「ふおっ、ふおっ、ふおっ、ようやく気がつきおったか。此処は天国、そしてわしは神様じゃ。」

「天国？神様？なら俺は死んだのか？」

「まあ、そうなるんじゃないが…実は…そのお主が死んだのはわしのミスじゃ…スマン。」

「いやいやいや、神様がミスして人殺すってどんだけだよ。つか、本当に神様なのかも怪しいもんだ。ぶっちゃけ俺にはただのイタい恰好をしたハゲじじいにしか見えないんだが……。」

「なあ、本当にあんたは神様なのか？」

「もちろんじゃ。なんだったら証拠を見せてやってもよいぞ。」

そう言つて目の前のじいさんもと神様は俺が生まれてから今に至る頃までのことを長々と語り始めた。うん、確かにこれは神様と認めざるをえないかもしれない。俺の黒歴史を楽しそうに語っているのにはむかつきますがマジで。

「オーケー！オーケー！あんたが神様だつて認めるからこれ以上俺の恥ずかしい過去を暴露しないでくれ。」

「なんじゃ、これからが面白い所なのに…。まあよい、そろそろ本題に入るぞい。」

さつきまでとは違い急に真面目な表情になった神様じーさん。俺も真面目な表情になる。

「今回の件はわしのミスじゃ。そのお詫びとしてお主を転生させてやろう。転生先はお主の好きな世界で構わぬぞ。アニメの世界でもゲームの世界でも制限なしじゃ。」

…あーなるほど、今流行のテンプレつてやつですかあ。しかし、まさか自分がそれを体験するとは夢にも思いませんでしたよ。となると、これだけじゃ終わらないはず…。

「それと、お前に好きな能力を3つ与えてやろう。なんでも言うてよいぞ。」

ほら来た！最近の神様はサービス精神が豊富だね。なんでもって言

った時点で自爆している事に気づかないのかな。もし、神様の持つ能力全てとか言ったらどう反応するか凄く楽しみだ」

「ほれ、遠慮せんと早く言わんかい。後が仕えておる。」

後つて、まだ他にもいるのかよ！この神様人殺しすぎだろ……。いつそ神様じゃなくて閻魔様に改名した方がいいんじゃない？

とまあ冗談はこれくらいにして、別に転生したい世界なんてないんだよなあ……。かと言ってランダムに選ばれた世界に飛ばされるつても嫌だし……。本当にどうするか……。

「うーん、じゃあ転生する世界は俺が死んだ世界で頼む……。」

「な、なんじゃと！お主本当にそれでいいのか！！」

おいおい、なに驚いてるんだ。別に元の世界に転生したいと思ってるやつはたくさんいると思うぜ。なのはやネギまとかのアニメの世界も悪くないけど、戦闘で怪我したくないし……なんかありきたりでつまらないしなあ。

どうせならもつと面白い展開に……——そうだ！

「なあ、神様。さっき言った俺の世界なんだけどさ。そこにアニメキャラが元々いるつて設定にできるか？」

「お主の世界にか？それは可能じゃが……。」

「そうか！じゃあ、俺の世界に全てのアニメの女性キャラが元々いたつて設定を付け加えてくれ。一夫多妻制度付きでな。で、能力はその女性キャラに出会える確率を上げる事と他の転生者の能力を無

効化する力、後は別にいいや。」

俺が考えた事、それは「リアルギヤルゲー」。要は俺の世界にいる女性キャラと出会って親密を深めて最終的に恋人同士になるのだ。因みに一夫多妻制度にしたのはもちろんハーレムを作る為！俺が好きな女性キャラはたくさんいるからな。

「また変わったのを頼むのう…本当にそれでいいのか？ハーレムを作るのならチャームとか必要だと「いらない」そうか…。」

確かにチャームがあれば簡単に女性を攻略できるが、そんな恋愛は俺は認めない。よくニコポやナデポで女性を惚れさせるやつがいるけど、あれは洗脳まがいの行為だと断言して言っただけ！

そういうのを防ぐ為に俺は転生者の能力を無効化する力を望んだ。俺以外の転生者がそこに来るとも限らないからな。やっぱ恋愛に発展するのなら自然な形が一番でしょ。」

「ふおっ、ふおっ、ただの変わり者かと思えば意外と頭がキレるやつだな。いいだろう、じゃが流石に全てのアニメキャラはちと厳しいからお主の知ってる作品のみで構わぬか？」

「ああ！俺はそれで構わないぜ。それと意外とは余計だ。」

まあ俺の知らない作品のキャラだったら居ても気づかないだろうしな。って言っても俺かなりのオタクだから大体の作品は知ってるけど…。

「久しぶりに面白いやつに出会えたわい。饞別じゃ、3つ目の能力はお主の体内に封印しておいた。もしなにかしらの理由で必要になった時、天に向かって「助けて神様」と叫べばわしが封印を解いて

やろつ。」

いや、必要になりませんから。つーか、俺にそんなイタイ事をしろと？室内ならまだしも室外でやれば確実に警察呼ばれるぞ。

「では、名残惜しいがそろそろお主を送らねばな。第二の人生を楽しんでこい。」

「おう！ハーレムマスターになってくるうつうつうつ……。」

次の瞬間、体が螺旋状に回転しながら穴に落ちると俺の意識は深く沈んでいったのだった。

フラグ1 それは運命的な出会いであった

「ゆうちゃーん。ママ今日引越してきたお隣さん家に挨拶に行くからいい子で留守番しててねー。」

「うん！わかったー。おかあさん、いつてらっしゃーい。」

はあゝガキの演技は毎度毎度疲れるな。でも、演技しないと不振がられるからなあ…これが前世の記憶を持った男の運命か。

あれから俺は前世と同じ世界に転生し、第二の人生を送っている。
言い忘れてたが俺の名前は田中勇也^{たなかゆうや}。今年5歳のピチピチボーイだよ…うん、自分で言ってる空しくなってきた。

この五年間は前世の時と同じで出会いなんてまったくない。もしかして、神様と名乗るハゲじじいに騙されたのかも思ったが、TVで一夫多妻制度が法律に定められてる事を確認して改めて転生したんだと自覚した。

まあ、出会える確率が上がるだけで絶対に会えるわけじゃないからな。例を挙げれば有名な芸能人が自分の街にやってくるのと同じくらしいの確率って感じだ。しかも誰に出会えるのかもランダム…ぶっちゃけ運ですね。それなら、絶対に出会えるようにすればよかったと思うが、先の見える展開なんてつまらないだろ？なにが起こるかわからないから人生は楽しいんだ。

「えーと、確か今日は年取った老夫婦が引越してくるんだっけな。」

前世での記憶を思い出しながら、窓の方へと視線を向けた。窓の外

では引っ越し業者が作業を続けている。

「さて、仮面ライダーみーよっと!」

やっぱ日曜の朝と言えば仮面ライダーでしょ。しかも放映してるのは平成の第一作目「仮面ライダークウガ」。いや、初めてこの世界でクウガをリアルタイムで観た時は感動したね。前の時はガキだったから全然記憶に残なくて、面白さに気づいたのは既に番組が終わった後だったからな。

「おおーっ！新しい変身がきたぞ……!!」

「ゆうちゃー……ん！ちよつと来て……っ!!」

は？今いい所なんだぞ。クウガが新フォームに変わる所で呼ぶんじやねえよ！これをリアルタイムで観れるのは今日しかないんだ。だいたい隣の家に挨拶しに行ったんじゃないかったのか？

「は……い！」

大学生時の俺なら断固拒否するが、今の姿は5歳児の俺な為、そのような行動はできず仕方なく母親の元に向かった。

~~~~~

「どうしたの、おかあさん？」

「あ、きたきた！これがウチの子の勇也です。ほら、ゆうちゃん

もご挨拶して。」

玄関の前に来ると、母親が誰かと話していた。年齢は俺の母親よりも若そうだ…あれ？でも、あの人が何処かで見たような…。つけない、挨拶しないとな。

「うん！はじめまして、たなかゆうやです！」

「初めまして勇也くん。私は隣の家に引っ越してきたプレシア・テストロッサよ、よろしくね。」

……はい？今なんと言いましたこの人は…？俺の聞き間違えでなければプレシア・テストロッサと聞こえましたか…。

「ゆうちゃん？」

俺が呆然とプレシア・テストロッサを見てた所為か母親が疑問を感じている。よし、まずは冷静にならなければ。いつまでもこの状態だと絶対に怪しまれそうだ。

「えへへ…よろしくおねがいします、プレシアさん！」

誤魔化そうと笑みを浮かべて返事を返した。今のはマジで危なかったな…まさか、一番最初に出会った女性キャラがプレシア・テストロッサとは予想外だぜ。しかも性格が原作とは違って優しいような雰囲気を出してたから余計に驚いた。ん？でもプレシアさんがいるってことは……。

「ほら、隠れてないで二人とも出てきなさい。」

プレシアさんの背後から左右にヒョコつと金色の髪が見えた。どうやら、今まで後ろに隠れてたみたいだ。そして、ゆっくりとその姿を見せる……。

「あ、あううう。」

「……………」

「あら、可愛いわねー」

出てきたのは金色の髪を二つに結んだ双子の女の子。俺はその顔を何度もDVDで見てきたから知っている。一人は混乱しており、一人は俯いているようだ。

「挨拶はどうしたの？」

「は、はじめまして！アリシア・テストロッサでしゅー！」

「フェイト…テストロッサ……。」

イエス！イエス！イエス！ついにキターー！ッ！きましたよ皆さん。時代が俺に追いついた…！これだ、この日の為だけに俺は生きてきたんだ。今なら世界の中心で「転生サイコーー！ッ！！！！！！」って叫べるぞ。

テンパって舌を嚙んだ女の子は『アリシア・テストロッサ』。無表情でほとんど無口な女の子は『フェイト・テストロッサ』。その二人の母親が『プレシア・テストロッサ』だ。三人とも魔法少女リリカルなのはに出てくる女性キャラで、フェイトは俺の好きなキャラBEST5に入ったりする。

「ぼくは、たなかゆうやだよ。よろしくね、アリシアちゃん、フェイトちゃん。」

今すぐにでも抱きしめたい衝動を抑えながら俺は二人に満面の笑みを浮かべて挨拶し、手を差し出した。

すると二人の顔が真っ赤に……はならず、戸惑いの表情を見せていた。ま、幼児ならそれが普通の反応だと思うがフェイトについては何故か震えている。

「アリシア、フェイト。勇也くんがよろしくって言ってるわよ？」

「あ……うん……。」

「……………」

母親のプレシアさんに言われても、二人は一向に返事を返さず、未だに俺を見ながら戸惑いの表情を浮かべていた。

「ごめんなさい。この子達、引越す前まで外にでたことがないから人見知りが激しいの……。」

なるほど、つまりアリシアは他人との接し方がわからず緊張して、フェイトは家族以外の人間に会ったことがないから怯えてたって所か。

「そうなんだー。それじゃ、ぼくといっしょにあそぼうー！」

「えっ？」

「きゃっ…！」

すぐさま俺は扉を開けると二人の腕を掴んで駆け出した。今の話から考えると、下手をすれば二人は大人になるまで箱入り娘となる可能性を感じたからだ。

ブレシアさんの性格やフェイトとアリシアが同時に存在していることから原作とは設定が違うことがわかる。恐らく魔法と言う概念もないだろう… あっても困るが。だから、そのような展開になってもおかしくない。

「ど、どこにいくの？」

「こうえんだよ。」

「こうえん？」

その結果、公園にむかった。遊ぶだけなら家の中でもよかったが、公園なら同年代の子供がたくさんいるだろうし、遊ぶ遊具だってある。それに子供は風の子って言っしな。人見知りを治すのに絶好の場所だ。

とにかく、これを逃したら次にいつチャンスが来るかわからない。今、俺のハーレム計画の第一歩が踏み出したのだった。

フラグ1 それは運命的な出会いであった（後書き）

出てきたアニメ作品と女性キャラ

魔法少女リリカルなのは↓アリシア・テストロッサ、フェイト・テストロッサ、プレシア・テストロッサ

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3131q/>

---

ハーレム大作戦！

2011年1月26日11時24分発行